金葉和歌集

元勝文庫

金葉和歌集巻第一

春部

堀河院御時百首歌めしけるに春立

んとするこころをよめる　源俊頼朝臣

打ちひさす宮の内にも春立ちぬ山の端ゆかぬ雪だにぞふる

春立てゆ消ぬ白雪ふりぬれど　藤原顕仲朝臣

いつしか鶯の鳴くべきかな

春の立ちぬるかすみかな春の来ぬらん

百首歌の中に初春のこころを人々

よめる　前参議実国卿

春風の吹くにつけてもおもふかな

早春のこころをよめる　左宰相経家

いつしか春の来ぬるかな春ぬれば

四月のはじめ小雪ふる　源俊頼朝臣

あるじの年の始のふりまひ初音とそいふへき歟

返し　　春宮大夫の実

鶯の谷出て梢の雪ふれは初音もやいふへき人

さくらゆきの家の合に家をしあり

　　少将の母

流れてもすめる水の底の山を春と知人

　　友原朝臣

年毎のふるの初音春の山のもとさかりの

家の風ふくあり　　大宰大弐長實

梅の花のかをきふ物なれはいとさらに家のあるしく

百首の中に宮のうちをしあり

　　俊恒大夫朝臣

鶯の鳴ふるしてやまひとすの山人春を知人

さしめて宮とさくといふ心をしあり

　　春宮大夫公實

春ふかしや梅の立枝に宮の梅星なりとしあり

　　友原朝臣

七月の八日春のあらしの宮の鳴けるを

こさくて

今日やさは雪うちとけて宮の松に出る初ねなるか

暁鶯とこさくやいつこと鳴あり

萬葉集つゝふかまをゆつしさに今一度のみのこそ
皇后宮うたへ人〳〵許さるまうさ
よ面白中の當とのうさ紙あり

源雅兼朝臣

春面ふり出ぬまとを當れ忘れ出ぬ梅の花ゆへ

源俊頼朝臣

良暹法師母の歌へまうけつふた
弁つゝうり家乃梅さうとふさ花うり
れいかに見あり梅ゆへ
はるさよいひまてく給けり

良暹法師

梅花匂ふあらいなきてそ春をは知へうり梅
梅花歌草といつること紙あり

前大宰大弐藤原朝臣

梅うえよ風や吹乃春乃来ぬ梅さへ白ひあられ
朱雀院よ人〳〵ゆうり梅花とう
ことゝあり

大納言經信

ふるさとの梅花ひこさり世ハ梅花ひ独や春風ふきしま
乃ちまされ郷乃家の三の合よ梅花ゆ

藤原兼房朝臣

[illegible]

梅花とあり　源忠季

かさりをて[illegible]と梅花を指して[illegible]

子日[illegible]とあり　大中臣公長朝臣

[illegible]

百首の内に子日のこころとあり　大蔵卿通房

春霞立ちぬとも[illegible]

柳の糸風よりてこそ[illegible]　院御製

風ふけば柳の糸[illegible]

百首の内に柳をよめり　[illegible]大夫公實

[illegible]

池辺柳とあり　源雅兼朝臣

風ふけば波のあやをる池水よ糸をつる岸の[illegible]

[illegible]　前参議尾張

[illegible]

[illegible]　菅原成通朝臣

[illegible]

藤原俊通

今はとてうちふりすてる袖もなほ[illegible]

花薫風と云ことを　摂政左大臣

[illegible]

白河の花見に御幸す　新院御製

[illegible]

[illegible]

久我左大臣

[illegible]

人よりてこそあら[illegible]

[illegible]

待賢門院芸藤

[illegible]

源雅兼朝臣

[illegible]

[illegible]

院御製

[illegible]

三〻雲とかたらふ春とみしかな心まてをすゝ樹の色

松のあひさしてをしとふとを

関大臣

春毎に松の緑にうつりまして風に乱れぬ花桜かな

右参議雅実

この春は雪の白〻桜さへ散ぬるに

山吹の花まてをしつゝ紙ゝあり

右京大夫経忠

山桜梢の風のさむけまに花のさかりに成そ侘ふ

花の春友とをしつゝ紙ゝあり

関大臣

ちるまゝに花と友とそ見まをの知人をれ

新院御方歌 花契遐年

待賢門院中納言

白雲はをしむ桜の梢にて千年は春を空に知られ

前右兵衛督

第代よみつゝ花の友なれは春の白ひいつる寺尾

終日花と暮をしつゝ

源頼亮朝臣

白雲にまがふ櫻とあつぬてからぬ山ぢなりつるふ

法川院法皇御女房を遣はしける

ありけるふ袖まいりて御前にて歌を詠ける

さつり者ろに女房ようりてこの歌を詠ける

よそのみにみるこそ雪とあるに見みるの櫻や盛なるらん

源師俊朝臣

考ふ者ねあるとしてうん櫻を心にて吹き出し山の嵐

歌山花とふふとも紙にあり

藤宰大武長実

かくこ山ふるふ花とみしより面影のこるあるを百年

海さ山ふ花とふふとも紙にあり

摂政左大臣

嵐ふき白ふ櫻と思ふ人て新ぬ山櫻よ面とあるを

人をに櫻の奇十首にまを詠ける

修理大夫顕季

櫻花咲ある河ふ岸山高とのかるぬこの花ふ雲

山花留人とふること紙にあり

大中臣公長朝臣

ゆのくえい本ぬとそを持ぬほ言とかさてぬ櫻ありせい

宇治前左近大夫家方合に梅の花のこゝろをよめる

　　皇后宮摂津

春の夜のやみは何ぞと思へども梅の花の香さりせば

源俊頼朝臣

山桜咲初しより久堅の雲井ふかくも匂ひぬるかな

遍昭

遍昭山花といふこゝろをよめる

大蔵卿匡房

初瀬山雲ゐにはるる花の咲あまたの天の川波立ちそへる

右近衛中将忠隆

右近衛中将ふるの白雪とこゝろをよめる

　　堀河院御時女房殿上の方にまちかくまうのぼりて花見あるべきさまにしつらふ

前参議経忠

春毎にあらぬ匂ひと梅の花ふるの風にはまたまがふ

　　僧正行尊

人よりて折ふしさかりなれば花にぞ宿れる春の風

後冷泉院御時皇后宮にて合に梅を読る

　　源川右大臣

春毎にあまたの梅の花の雲ゐにのぼるにほひ

月前見花といふこゝろを読る

月新に花ゆゑ雲に深雪風のつくさに花をさそふ
別墨に家にて梅の香十首人々によませ
侍けるふしのうち
大納言為房

春の日のけさ空にふる雪風ふきそへてもちりぬ
あと上落花とゆくえ知らぬ
源雅兼朝臣

花さそふ嵐や峯をとをるらん梅ゆゑ谷川の水
落花満庭とゆくえ知らぬ
右兵衛督實能

ゆゑ新に春ゆゑ嵐ふきそへて庭の雪ふる花
法皇院御所中宮方ふく風ふりにも
うつりけりとゆくえ知らぬ
源俊頼朝臣

梅の香をみえて梅花ゆゑ風のふきぬけ
落花のゆくえ知らぬ
長実卿

春ゆゑ梅の花ゆゑ心もうつるをり
落花随風とゆくえ知らぬ
右兵衛督忠親

うつりゆくいろ深けれど春風の花とんよ世をあらん

水上の落花といふこゝろをよめる

大納言雅兼

みなせよりちらす山河の井ゐのかけにてかはをせき

右京大夫道朝臣

水の面に散つる花とみるまでに初瀬風ふきてしらけ

落花雪を乱るといふこゝろをよめる

藤原兼房

春ゝ雨をきゝ宮ゐちりて色こい袖のぬれてあるつゆ

堀河院御時花のちるを見てけさなりの物のふてに山ゐとふけま

てあはさなりの物のふてに山ゐとふけま

せばゝ中宮ゐ仕方よりせ行ゐ

けつと家乃御屏風してかうあるあとたちを

しとあり考れしつゝまりけつ

御堂殿

樓花雲ゝ隔ゝてかさめてよ聖ゐ山ときゝふ八月ゝ

花乃庭よりちりけりしらをそゝまつ

都芳門院安藝

庭の色ゝとゐ樹ゐ咲ゝ色ゝちすのゝやいんなゝ人ゝ

夜思落花とゝふゝるゝをゝまつ

澄源法師

衣ぶくろにかくしつつ櫻花をよろこぶなりとて

きりのまりけるふ山面とはてりきるとみ

てよめる　　高階經成朝臣

櫻咲山面とはる嶺のしらくもやこれとみるまで

花とよめる　　右兵衛督伊通

白雲と見るまでにみてて櫻花もちれて葉の雪とそ成

後冷泉院御所時月のあるつきけるに女房

達とはなをみくに南殿よりてせをけり

よ庭の花をちりて面白りきるとはる境

して見てつきもの人はよみをきやと

おもせとありて中宮より御方ふ下野

やのんとそめふはるとそりけ

也ハまりあるとはらんてあのそれ

なりてさいまをれ　おはせとはりそれた

ありあまりまりをけるとたるまいること

作あるとれいつるさりきる

下野

義家の月の光はなりせい雲あるのもとはそはま

彩虎のさきはりてふく強花董風と

いつるとはるある

菊そなへ花のありさまをいとをかしくなをさらぬ
なり　中納言雅定
百首哥よみけるふさうち
ひんぎしまつる
山里は雪のさらにふりそへいとひとれ
百首哥の中に　權僧正永縁
ふるさとのうめやう法ものさかりにあらぬ雪とみてを開ける
雪の花とよめる　大納言經信
あしたの小細殿門とあけまいらせ給へ　源俊賢
ゆく
菊代とよめる　津守國基
鴨のみや聖淀の小田をうちもとをれ稲荷てらにまゐてゆく
後冷泉院御時弘徽殿女御の合に菊代
をよめる　藤原澄實
山里の御門の小田に菊代をいとをかしうとをれる
人をあまたつかはしてこれをとりにつかはす
てふ家の山吹をおりけるをそよめる　中納言雅定
秋宿にまゐりこむ人もかりそめにかりのやどりとなれ
ぬるかな　藤原為忠大臣

限りて花とはおさ山吹とてとゝぶ打そめて九月後
打ゐんとゝあり　大宰大弐長実
雲ふゝ神ゐしほの新へてうろひまり山路も
後冷泉院御時歌合に歌をし心とゝあり
前大宰大弐藤原
山吹よりさゝ風をんゝ八重ゐゝとはちゝさら笑
映見鶯躑躅と云ゝとゝあり
拾遺大臣家参河
白さゝ〳〵ゐ花ゐ〳〵ゐ山下てゝす岩ゝゝふ
院御歌にて樽上花とゝふゝと紙ゝあり

文典侍
多〳〵ゐ松よりそ〳〵ゐ東海乃波ゐ樽ゐ山吹ゐ
花花とゝあり　菅原孝標女
紫乃ゐ花ゐ山ゐ花ゐ乃ゐ花ゐ松ゐ山ゐ花ゐ
坊乃ふゝ山ゐ成けゝとゝあり
律師清覚
ゝゝ〳〵ゐ山ゐ秋ゐ花ゐ乃ゐ花ゐ雅ゐ山ゐて咲ゝ
黒花ゐ松ゐ山ゐふゝ紙ゝあり
良暹法師
春風乃ゐ吹せゝゐ花ゐ山ゐゝ乃ゐ花ゐ

二條関白乃家うたて池の藤花とふと詠

大納言經信

池よりは松のこしえふ紫は波打寄る藤咲よせり

百首の中に藤花とあり

修理大夫顕季

住吉の松よりかゝる藤の色は波もおりたん

面中藤花とあり

神祇伯顕仲

あさ日さす藤の色はうすけれど春の雨とぬれ

藤家藤花とあり

四十五 家越後

藤の色匂ひ深くとてそさ行

藤原母

藤の花や雲のうち雲とて雲の下に藤咲

二月盡とあり

大僧都證觀

雲の行方よ藤の咲かゝる新に立やとゝまると

中納言雅定

紫の雲のうち雲と行ふもとて心とさゝを作しつゝ

二月盡とあり

四十六

春はあけぬとたのむまに　ふるとしの雪
重服より後はじめて三月晦の日人のもと
よりとつまくに給はせたりける
　　菅原孝標朝臣

ふるとしのこのかみ　ふるとしの雪
物思ふ人の家にて三月晦の日雪降りける
まぜ給はせたりける
　　源俊頼朝臣

ふる雪の月のいとにさそはれて　こゝにみあと
のこるまでとや

金葉和歌集巻第二

夏部

五月ばかりのあけぼの　源師賢朝臣

ほのぼのといでそめしかぬ夏衣ひとへよりなほ心ぐるしき

二條院の御家にて人々に詠み侍りし歌のうち

とりあへず侍りけるほどのうた　藤原盛房

夏山の雲の葉まもりつゆ落ちて夜の衣を打ちぞ侍る

嘉承元年五月三條院裏にて夜打ち侍りし

やすらはんとてとまりぬる院御製

やすらはで待ちぬる夜の袖の露ぬれぬるかたをかへしつるかな

大納言經信

玉掛鬼とぞ名づけたる成よりうちゆかせて神祭るうま

鳥羽殿にて人々に方つかまつりけるふ

郭公の心を詠む　長家卿

言の葉をたづねてさぐる郭公ものの里人ぞ聞くらむ

郭公語らはしてさぐるとて　大納言忠房

いはまくらとうちてはらはせ山ちかき垣ねつゝきに咲る卯花

侍従

雪ふりしを卯花にまがへて折しらるゝ月の新玉

摂政左大臣

卯花のさかり過ぬれば山ほとゝぎす花なき里に鳴つるかな

卯花離宮

中納言實房

神山の榊にさかる卯花の白妙垣ねめぐらん

大納言経房

三つ乃めの蕨やゝ焼やゝ卯花の咲ぬるかやまさをの

源盛清

卯花と名のり川乃沿ふそはくるもあるてゝ卯花

大中臣定長

卯花乃白菜もみて咲あまた宮や花のさかりの春

鳥羽殿前合ゝ郭公とゝあり

源理大夫敦季

海山生くもゝ霍ふれば時鳥猿乃宮ねとも鳴

郭公多つねとゝいふとゝあり

藤原節信

春ふかゝ暮てゝ郭公いとゝ雲つゝ初音なるらん

郭公ゆめ十首人〳〵ゆゝしませ給けるとき
てゝ
ゆゝしき事ゆゝしかるよやとれば哥ゆゝしかる物をそ給へる
源雅光

郭公なきつるこゑ〳〵絶ぬとそれをたにかけ
聞ゆると思ひけるふ花の日ひさしてそ二日ゆ
つとゆゝしく鳴きるとをきて
橘成元

郭公ゆゝしかれ禁もて来るゝ哥ゆゝしとこゝひさしく
長實ゆゝ家ゆゝ合に郭公ゆゝしとあり

年毎ゆゝ哥ゆゝしかれと聞ゆる哥ゆゝふりせぬ物をそあり
聞ゆると云ゝとを
藤原定家卿

郭公ゆゝ哥ゆゝ人聞ゆるまつゆゝ哥ゆゝ聞ゆるを
郭公とゝあり
藤原俊成卿

時鳥ゆゝとゝにあゝて哥ゆゝ聞ゆるを
兼盛二年閑書奇合ゆゝ聞ゆると人ゆゝ
つゝゝゝあり
藤原孝善

郭公あゝてゝあゝ哥ゆゝ聞ゆゝ哥ゆゝ
郭公とゝあり
權僧正永縁

なをあひなめてしられぬ時雨いつも初雪ふりそをれ
人〳〵十首ずつよみ給けるなかに
源俊頼朝臣
給ひて雅らせい郭公雅らの山ひかなりまし
中納言実房
いかり山雲やたえまに時雨まつ山ちかなりとおもへて
時雨雲をたちつるすとしられぬ紙ものあり
たちつるなりせい時雨降ぬるさすやあはま
郭公まつとしふとしとをまを給ひけり
院御製
時雨ぬるよりとてあるとて式部乃君やへの月ふるん
後忠ゆ乃家ぬ方合ゆ時雨ぬ紙ものあり
二條関白家歌
給人乃宿とて時雨ぬ山へ分ぬくるてん
中納言女王
時雨ぬめ〳〵ぬをいつとしぬまとしつ時ぬめ〳〵
郭公とめあり
前斎院六条母
やとをく三ぬ〳〵時雨給ぬ秋乃数ぬ乃ぬ
中納言雅定
時鳥まれ時雨ぬ山ぬ乃ぬ

宇治前太政大臣家の会に時雨をよめる

康資王母

山をゝ海をゝ舟に時雨ふるなりとそ思ひ侍りける

匡房卿の義作守りてそらに時雨ふるなく

時雨をよめる

中原高真

雲をあゝ漕そわたるとは時雨ふるなりと舟てをねハ

藤原成通卿

時雨一首をよめる

月前郭公

皇后宮式部

郭公雲に隠れまゝにしりの月の新月のこゝろをもよめる

暁郭公をよめる

源定信

月ありとうゝ坂山の時雨ふるなり

郭公と題をよめる

よゝ人しらす

時雨題をよめる

西行

郭公をよめる

大納言経信

郭公雲路に海とふ鳥なれとも雲ゐ山ゐ世に月ゐ

五月廿日實盛ゟ乃りとして公とゝ申まとけつ
ゝすゝて　　四大臣
あやめ前ゝゝ之ゝ来りゝ今日公ゝ被ゝ示ゝ
永暦元年殿上の根合ゝ菖蒲とゝあつ
　　大納言經宗
百代なりゝ物ゝ廿日前ゝ来ゝりゝ
郁芳門院の根合ゝあやめとゝあつ
　　右京大夫
あやめ前ゝゝ引ゝ
　　兼盛
兼盛二年内裏ゝ被ゝ合ゝ菖蒲とゝあつ

春宮大夫ゝ實
あやめ前ゝゝ之ゝ宿ゝ仕まとゝあつハ
交ゝ仕ゝ引ゝ
つゝすゝて
　　權僧正永縁母
あやめ前ゝ我身ゝ引ゝ
百ゝ代ゝ中ゝ
　　美濃大夫ゝ實
菖蒲前ゝ宣旨ゝ仕ゝ物ゝ
五月廿日ゝ
　　右近衛出羽入
　　右近衛出羽入

おなしくはかさねてふけあやめ草五月雨かくかるともまれ
昔中院にたちよせ給けるにはみしさうし
あやめと人の中院わたりにてつくりけ
る紙に書つけてよみ侍りける

三宮

あさまたきやまのしたのあやめ草たてぬまには生ふけるかな
百首の中に五月雨をよめる

参議師頼

五月雨に沼の岩かき水越て真こもかるへき方もしられぬ
五月雨の心をよめる

藤原定通

五月雨は日数へにけりあつま屋のかやか軒端の下くつるまて
承暦二年内裏歌合に五月雨をよめる

源通時朝臣

五月雨に玉江の水やまさるらん蘆の下葉のかくれゆくかな
権中納言俊忠の家の歌合に五月雨の心
をよめる

藤原顕仲朝臣

五月雨にみかさまさるらし沢田川まきのつき橋うきぬ斗に
五月雨をよめる

左兵衛督實能

はるゝれは当のみねよも重て水のみかみせてそみる

三宮

五月雨に六日の橘のさかりまでは松ある人もしらでこそあれ

摂政左大臣家にて夏月の心を

神祇伯顕仲

夏の夜は庭に降しく白雪を月の入こそをしけれ

権中納言俊忠の家歌合にくゐなをよめる

藤原顕綱朝臣

里毎にたゝく水鶏の音すなり心のとまる宿やなからん

摂政左大臣家にてくゐなをよめる

源雅光

夜もすがらはかなくたゝく水鶏かなさせることもなき柴の庵やと

實行卿家歌合に夏風の心をよめる

修理大夫顕季

夏衣すその野原を吹風に思ひもあへず鹿や鳴らん

水風晩涼といふ事をよめる

源俊頼朝臣

風ふけば蓮の浮葉に玉越て涼しくなりぬ日ぐらしの声

源仲正

澤水におりての影のうつるとやふるらん

神祇伯顕仲

床夏に置くしら露はこぼれつゝ秋のけしきを夜やあかすらん

家ゝ合り菊橘とゝあり

中納言俊忠

さ月やゝ菊橘のかをりを風の行てゝ宮ゝ行つまけり

百首の中に菊橘をゝあり

藤原為家卿

宿ゝに菊あらはむ匂ひけり一本ゝ風に残りもて

二條院内裏歌合

菊後朝菊といふるゝと

ゝあり

源俊頼朝臣

この里ゝ久立ゝ寄り浦菊の宗家のをゝ菊ゝ

宗ゝ合ゝ家ゝ合ゝ小橋河とゝあり

中納言雅定

大ゝ内ゝ歌ゝ合ゝ菊ゝ

夏月とゝあり

源親房

おゝ月ゝ二上山ゝ雲ゝ立ゝ月ゝ出ゝ入ゝ

九月の廿日ゝ

人ゝ丸ゝ

秋ゝ月ゝ言ゝ

ゝ

摂政太政大臣

八月ゝ照ゝ月ゝ影ゝ清ゝ風ゝ

ゝ実ゝ

ゝ

藤原基俊

夏秋の月袖ぬらすの比すゑひろ浦のいてむとぞ思ふ

秋蒲一族とゝふ紙のあり

中納言為忠

見そなはせ汀の風のすゝさハ一秋とゝあて

あさゝやまあるゝ年

金葉和歌集巻第三

秋部

百首の中に立秋のこゝろを

藤原大夫三實

とことゝの吹ゝ色ぬる風なれは物思ひそ添ふらはは

野草常常家とゝふ紙のあり

大宰大弐長實

四つ目葉よりあるの花の白露と吹ふくしをれ秋風

紙草花とゝふ紙のあり

皇后宮義法

なくさめやかたらひて夜いたくふけぬ時の初風吹くすさ
浅冷泉院御所時皇后宮歌合秋哀合
七夕乃もとにてあかす
左兵衛督
万代を経てみるべき七夕は雲上にて
七夕をこそあつ
紫式部法師
七夕の昔を思ひやるべくしてます
七月七日又服して給はりてこそあつ
橘元任
夜長いとりやとりと七夕ふるさとにてあるさそ
前斎宮内侍
恋ゝてあふひとりや七夕乃枕よりもはつ尺
三条
あまの川の別より胸乃こうるしさは思ひをとる
中納言国信
七夕よ世乃哀れ深けさふあはぬ事乃をとを
七夕後朝乃心を
限りて別るゝを七夕乃袖乃濡の色はうつる
内大臣
七夕乃わかれの袖よりも花のうつりを深けるらん
皇后宮權大夫師時

内大臣家越後

天の河へさしぬる舟よ波をよみ雲もとまらてかけしぬれけり

源俊頼朝臣

ゆふさはおきせもしらし天の川おかぬ渡よわたしゆきても

草花告秋といふ心をよめる

源雅兼朝臣

咲初るのへの花の女郎花秋と志らする素にそ有ける

おなし心をよめる

源縁法師

咲にけり口なし色の女郎花いはねと志るし秋のけしきは

初秋ふしみにて山家に秋来と云ことをよめる

なかなかに秋はきぬらむ山里はくすはひるかへす風の音にや

大納言経信

田家早秋といふことをよめる

右兵衛督伊通

稲葉吹風の音せぬ宿ならはなにゝつけてか秋を志らまし

山家初秋といふことを読る

藤原行盛

山ふかみとふ人もなき宿なれと外面の小田に秋はきにけり

師賢朝臣の梅津の山里に人々まかりて田家秋風といふことをよめる

大納言經信

夕されば門田の稲葉おとづれて芦のまろやに秋風ぞふく

三ヶ月の月をよめる　大江匡房朝臣

山の端ゆ出でしかたちの三日月の眉のごとくも人ぞ見まほし

摂政左大臣の家にて人々月恋のこころをよませ侍りけるに

藤原忠通

風ふけば峰にわかれし雲まより眉はらめく姿月哉

後冷泉院御時殿上人三合の月の心

大納言經信

月新しきみかきの式天の原雲ゐ風ふく

月後宿友

月ゆゑ紙ものあり

法橋忠命

芋掘の後ねりそ出ひ月ゆゑの友ふる雪

閑見月

月ゆゑ

別仲卿女

ふるさとの芋掘の後ねりそ出ひ月ゆゑ

秋の月

秋の月ゆゑ

前中納言俊房

秋ゆゑ月ゆゑ人ゆゑ

鳥羽殿にて張宿月とふと題しまゐらせし

藤原為実

秋をへぬるかとせとに張れはせめぬるかはをやとる月哉

寛治八年八月十五夜鳥羽殿にて池上月

とりてはそふとのつゝみをせ行けり

院御製

池のふこゝろひの月をやとりそめ心のまゝにはるるものとゝん

大納言經信

照月の影まし水をやとるとも玉ある数といはゝ玉はは

月とそゝまゐる

民部卿忠教

はるゝ日を今秋の月とかゝるゝ人やなかめ出もしん

後冷泉院御宮后宮の合に弱法のこゝ

ろをよめる

藤原澄經朝臣

引弱の数ゝかゝみてつゝ人間の清のしけ水をありけ

弱法のこゝろをよめる

源仲正

東路を遠く出るゝ月の弱よこゝろひやあ弱のせき

八月十五夜の月の紙にかきまゐる

源親房

さやけさは思ひなすかの月新とて秋とゝ人はとゝやゝ

同九月あつまりて八月十五夜とよめる

春宮大夫公實

秋の行かぬ方をしるべとやなれとて我の月はかたらはぬ

前斎院六條

雲の波こゆるさ衣の月の影清滝川にうつしてをみつ

八月十五夜の月に心をよせける

源俊頼朝臣

すみのぼる心やそらにうかれ雲のうはの秋のよの月

望月をよめる

望月をそこふるのまつの秋をもとはれぬまは

人のもとにまうりて物やけりかの月の

いりぬるかたをながめつる

源師俊朝臣

いかにして雲のかなたの月をみむ天の川なる月やこがるる

秋長月の山居をよめる

ふかきあり

大納言經信

とまりなれて里の月をこそ思ひ出ぬるとなれば

兼盛二月裏に月をよめる

芳文大夫公實

墨ぬりのとりてとりめ山の端に入月をかきまはす

宮治前左大臣家に会う月とてあり

皇后宮摂津

晴れ行く宿のしるべかな妹のみをおもふ月の光さえゆく

源俊頼朝臣

山の端よりいでし秋とのみ捨て徳を月の立のうつれ

摂政太政大臣

水上月とてあり

蓮ねたいつこを出でぬ沼のふるすやとる蓮の月

宮治前左大臣家に会う月とてあり

一宮紀伊

筑山にいつる出づる月を見るとき新とぞ思ふ

秋ふかみ月のみ山にいでて月のあてつ

ゆ秋くもりあるかな

参議師頼

いつ人の雖恋のとを思ひ出でたつ乃ぞ月やもんん

秋月出畫といつること紙よりあり

前京澄法朝臣

草の上に家ゆりせいふみて今秋乃月とるとこ

既明月せいつることとあり

源宗于朝臣

乃ぶる秋ぞ来まれおしよ雲晴て心乃まくに出あり月ぞ

八月十五夜に人〳〵のよみけるよのうた

平師季

三笠山光をかくして出るかりてのみる秋のよの月

宇治入道前太政大臣三十講の合の月を

心をよめる

みん人しらす

宿〳〵の月の光を西さりける秋のよりの出あかり

藤原忠隆

月をよめる

なかめこしかゆくまに雲晴て空も澄まさるあの月

素覆乃花林院の合の月をよめる

権僧正永縁

いるかの秋の光のまさるかな山の端の月

源頼政

詠月哥

三笠山のかたの月の清かれ神のかもとやたのん

藤原頼政

左京大夫家歌合の月の心をよめる

大納言経房

春日山の峰より出る月新しき光の川をあらなるとも

彫季の歌

九月十三夜人〳〵月のうたよめる

左宰相実

墨のゝ鏡とかゝる月新しき心をかゝる人のあるかな

源俊頼朝臣

村雲や月のまとをのこるらん晴れまさりてもまちぬる

月入る所とあり　　右京家理朝臣

今よりの心ゆきゝ月新しく行末を知るとて人さそひけり

月照古稀とふことを詠けり　　三宮

ゝ後とて人をかよはぬ山路月ひとりそ見ぬ海ちとれ

山上月とあり　　藤原実光朝臣

月新のさゝよ海せゝく行舟の沖やこゝまちあるらん

海ちらす　　左宰相実氏公

ひとねふ月ゆ海ひてゝ西家といとゝみけり秋の月

永徳二年殿上の会に月入るとあり　　右京家理朝臣

雲ふかくなれ雲ふかくなれ月をまつ

月前猿宿とあり　　源理定朝臣

松ひゝ小夜ふけさ秋のすゝなりゝ月をいとゝみるゝ

独見月とふ　　藤原有教母

なりもとゝ小夜ふけぬとゝもおりをり月や苔の形見ぬ

行路嘶月とあり

詠歌よみてとなりに立る月の影を送る山路をゆく

権僧正永縁

射山待月といへるこころをよめる

高砂月まつ程のうたゝねは山のこゝろにあはれ

左衛門督右大臣

山家曉月をよめる

山里の西の山もあけぬるを月とみるまで月のあるつとけるこゝろ

中納言俊忠

とゝんこの月をまつ都の人々月を

いとなりけりと雪てゝ

平忠盛朝臣

高砂月とあるは波風は波ゝ高きを月お蔵来とゝ

源俊頼朝臣

風や葉をふき祈を吹ゝ月は紅葉の色を

出雲守

寂蓮法師

前斎院六条

寂蓮法師

藤原仲実

けふの東河の芦村にたつ雲のかゝるさとかも
聞しらす　よみ人不知
玉つさをかきてかけたる雁金のゆくは空にも聞えけるかな
雁金の鳴をきゝてよめる
春宮大夫公実
いせ山の峰の嵐やさむからん衣かりかね空になくなり
雁をよめる
三宮大進
妻こふる雁そ鳴なる独ねの床の山風身にやしむらん
暁聞雁といふことをよめる
皇后宮大夫作

おふとまるこの月影に衣をうつさとしのみゆき
夜聞雁声といふことをよめる
内大臣家越後
秋来ぬと鳴なくよりもあはれなる秋月は雁の妻かねとこと
摂政左大臣家にて旅宿雁といふことをよめる
源雅光
ほとときは数あまき旅ねの雁の声にこそあかぬ袖哉
百首哥の中に雁の哥とてよめる
藤原顕仲朝臣
世中をあきてぬとやきそしら今はかへりの山にまよはん

[illegible]て素[illegible]ふ廉[illegible]

藤原行家

野[illegible]節[illegible]

皇后宮肥後

白[illegible]と[illegible]

[illegible]

僧正行尊

小[illegible]原白[illegible]

[illegible]

左宰大弐長實

[illegible]

澄源法師

[illegible]

中納言俊忠

[illegible]

藤原[illegible]

[illegible]

藤原[illegible]

[illegible]

按察大納言

佐保川の汀にさける藤袴波のよりてやかけんとすらん

蘭をよめる　右兵衛督伊通

ふるさとに人をとふよや藤袴秋の野をにほひ兼ねたちなん

神祇伯顕仲

何か小野の原ちめやあさみどりにほひ出る蘭かな

鳥羽殿前栽合に女郎花をよめる

春宮大夫公実

あさ露に露吹おくる嵐風になびきそふ女郎花かな

野花といふことをよめる

藤原仲家

いまはしも穂に出ぬらん東路のいはたのをのゝしのゝ小薄

野草留人といふことをよめる

平忠盛朝臣

行人をまねくか野への花薄とまるも宿に旅ねせよとや

堀河院御時御前にて各題をさくりてつかうまつりけるに薄をとりて

詠つかうまつる

源俊頼朝臣

鶉なくまのゝ入江の浜風に尾花なみよる秋の夕くれ

川霧をよめる

藤原基光

宇治河の川せもみえぬ夕霧に槙の嶋人舟よはふなり

河内守之子にあつまいたる女房の歌とそすす

都花門院前載合し菊とそあり

藤原行家

中納言通俊

盛りの菊の菊と名付これ侍りさえぬ色そつを見る

鳥羽殿前載合よさくとそあり

源理光朝臣

文永年まて者ら摘つき菊ふれ家もつくとそ

摘改た大臣家りて歌蒲垣とそよ

めり

藤原仲實朝臣

駒のかすとそ見れ立秋の落る歌家物語とそ見る

兼盛二年四裏前合よ紅葉とそあり

源師賢朝臣

そこそこ紅やいたくあるつる皆その原の紅葉に

宮治前太政大臣大井河ふまりとそ

けるふとりふさりて水色紅葉といふ

とそあり

大納言經信

大門光殿四いくさ三よ光れ歌よあるめ色そ

左里大后文扇合よ人ふりて紅葉

ひろとそあり

源俊頼朝臣

紅葉とゝめず　友則仲家

岩間ゆくゝみ分て立田姫乃紅葉を風ふくも

大井川水まきよりはしまる　修理大夫顕季

大井川おなじ色にくれなゐ紅葉とは流るゝやうん

源山紅葉といふことを　大納言経信

山守よそのゝ岩たゝくゝ紅葉はなをそれはせよ

紅葉とゝめず　神祇伯顕仲

ゝそはみな岩はしりたゝや岩ゝと禁乃里に風ふくまろ

友則仲家

ゝそらゝ岩ゝとゝゝ鳴鳥はゝ紅葉に流れ

落葉埋橋といふことを　修理大夫顕季

小倉山ゝ風乃吹ゝに岩乃ゝ橋紅葉ゝ水ゝ

落葉義ゝとゝゝ　大中臣長能

大井川義ゝ紅葉ゝ乃ゝ立て　ゝ乃ゝ流ゝ岩のゝそ

落葉通風とゝのふ

左宰相中將実房朝臣

白浪さみだれの落葉と風のせゝらぎ

九月盡のこゝろをよめる

中原經則

あさぢふの宿の秋の夕ぐれとすん

源師俊朝臣 後拾遺

落葉をはらふ袖の露よりも玉ぢるなみだ

九月盡日大井河にまうでてよめる

藤原定家朝臣 玉葉

おもかげ宿る月の落葉は袖にとゝまるせゝの

ながめとぞ思ふ

金葉和歌集卷第四

冬部

兼暦元年御前にて殿上人のことを
ゐてとさせたりしに雨はるまりけふ
時雨をとりてはうさまつりき

源師賢朝臣

神無月ふるまにしらぬ山下てらす紅葉に
はる二位為家親子家雙紙合より時雨とよめ

藤原為季朝臣

時雨はいろ山の紅葉といふ所よりおしなべて

素覆りて人〳〵百首をつかうまつりけふ時雨を

山川のあまさへて時雨のふる紅葉の色そふるなり

権僧正永縁

寄ふる袖とめすす時雨は桂の板屋もの社えふ

三条とのゝ

源定信

神無月時雨のふるこひよ多くふるすう山れ

後朱雀院御時前にて寄紅葉と

いろとゝとめつ

前中納言資仲

紅葉ちる山の秋雨時雨の白川のふれとそ

大井川より西りて落葉とよめる

平敦親

大井川落葉とわたるいろこそ錦小弾とうけてこそみま

落葉とよめる

大納言經信

三室山落葉なりしは龍田川紅葉の上は錦なりけり

竹風吹葉とよめる

前中納言基忠

なほ竹の葉ゆえ袖とうちはらふ秋とは風の音ぞ

十月十日比より雨降りなりけるを見てよめる

法印光清

竹のはに秋とそなりさしもとて雨とこそ

百首の中に紅葉をよめる

源俊頼朝臣

立田河とうみなして秋の山もの上の紅葉をそみる

網代とよめる

皇后宮肥後

もとのうら河をいかに網代木八立田の山の秋の色

月照網代とよめる

大納言經信

月清き世に網代よりひをは玉藻よりあらはれ

龍宿冬夜とよめる

猿ねとりの秋とこたへつゝ的のあるしるたそうの賀伝通

関路の月といふこと紙のあり

源兼昌

澄渡る月の影にはよく聚ねの笑ひを面のせさる

祐徳伯形仲

風の音に波の濃と清山を分ぬる立ぬなくなり

秋をしるあり

藤原清輔朝臣

白浪の寄せかへる音にそ秋ひとへ立ぬり

岩水猪秋とのつること紙のあり

関大臣

前川のとゝに結ぶ秋そ見る人も白玉鏡なりけり

百首歌中に氷をよめり

藤原仲実朝臣

三方の馬の音ふ原風寒そ乃池の水三ぬり

冬月とあり

祐徳伯形仲

冬寒み空ふ澄まる月新宿ふりゝそとる嵐

氷満池上ゆふとあり

大納言経信

夕月夜ひとり枕ひまの風

深山霧とあり

大納言通房

[illegible]

水色雲葉と題よめる　大中臣公長朝臣

[illegible]

宇治の大臣の家の歌合に雪の心をよめる　源頼綱朝臣

[illegible]

橋上初雪といへる題をよめる　前斎院尾張

白浪の立ちかへるかと思ふまで橋より見る白雪

初雪をよめる　大納言経信

初雪はまさしく春の色なれば雪の中にぞ梅はさきける

雪中梅をよめる　源道済

[illegible]

雪ふる時の心を　源俊頼朝臣

[illegible]

[illegible]　四条大納言家越後

[illegible]

百首歌中に雪の心をよめる

いふせんきの松山のことは峯の初雪消もそそれ

宇治の大臣大臣家の合の雪の山とよめる

大納言道房

物の雪に松の青葉もうもれて三つの山の雪の中

望后宮摂津

若代のもとつ松はふる雪の雪をもとけぬあるとすん

中納言女王

大嘗会の主基の屏風中国にある山とよめる

藤原為忠

雪のふれしいやあつ山は積るほどまさりゆくらん

源俊頼朝臣

雪のふるとそよめる

雪のふるまに山はゆくさきのゆくさきのよ雪ふりて

雪の山の雪のよ雪をそさいり結けるに山さき

つまにとそ紅のつ使結りてけるまま

藤原大臣

つりけり

羽毎の鏡のけふわをもをしてゆみすらもいそうれ武

ふみうまとそよめる

望后宮摂津大夫師時

すきうの雪のよ立強さへ雪の山の雪と見るかな

百首の中小雪紙よめる

澄源法師

都あかき雲ふりあまたはたちさし槙の杣山近ふかくん

皇后宮肥後

なをあくつるまつ雲に袖ぬれて思いふさひしくるくん

選子内親王いつさふれしゆゆけつ河岩の

波うちきるに月乃あくつまに雨まつり

たりしに女房をまねらけつるに月をみさ

つをけまに殿上乃月ふしもしつきに河

かさしあつる秋まやいるん月と言とふひる行り

女房新藤原

冬月とてあつ　源雅光

あらし山嵐ふかるねらにえそて出つ秋まに月式

家雅朝臣乃つるの家に陳子に給はらんし

あつ前とてあつ　康資王母

榊葉や立まふ神の退風よるひね秋に河しとそふ

神示乃ふんとてあつ　皇后宮權大夫師時

神垣乃みむろ山小雲に山てをる榊葉そふさ

おとてまを祈つ　三条

祈ることなるまゆゆ世乎祈ふ乃のをぬらハ

あ馬とてあつ　前斎院六条

中ふ小雲乃ふきと重そやをつの毛衣にえまさ尼

池水とあり

お歌会用行

浪花いふかさねと定むるおまち田の池のたゝ浪

藤原為秀

ゆ〜らす

さしもなほひそやま藤の葉さゝ葉もとも枝花

俄花待春といふことを

内大臣

俄とふ年ぬるゝ情しるいかのゆらふ去をまつふる

歳暮とあり　菅原成通朝臣

今年とも暮ぬるとすれはまに去いとふあの立あさ武

拾改たる家にて名残をさそりてよみ

けふ歳暮ととりてあり

菅原永實

うそふふ物もそふ俄月ふ月ふ世あてをれさ年ぬ暮

この方ふそて色ぬ月ふ月まりに名

歳暮ぬるをとふ海を行けり

三宮

いふもの暮ぬるとふ月を数つ老ぬ年ぬり

ぬあ〜ん紙

中原長國

年暮ねとりとそさふ海ふ春ぬ上よりとふ世

中納言國信

何ときわかはなしかの書てことをくるる
成よけるれ

金葉和歌集巻第五

賀部

長治二年三月五日内裏にて行不改色と
いへることを　堀河院御製

色ふかくそめうりせぬる行さきてよ世の色めかり
都芳門院の御合に祝のこの紙にかく

六條大臣

君代にあはせてぞ思ふ岩清水なかれ流と見るよりへて
堀河院の時中宮堀川院にまゐ

時は松契遐年といふことをよめり

大納言俊實

あれ西は松の下枝の紅もちあまし千年池の水の色

禁中蛍花といふこと式をよめり

中納言実房

九重にひさしく白へ雪積のもとさき風ぞ吹

花契遐年といふことをよめり

源中将俊親卿

第代とはいてもいはじ榊葉さかしむ春は沼のまつ

摂政関白家合に祝のこころをよめり

源俊頼朝臣

たのつゝ稚身さへそいはゝ君ぞ千歳をあまの新さに

百首哥中に祝のこころをよめり

源俊頼朝臣

君が代は松のゝ葉に乗りて雪ぞ降ぬる

いとひつゝ

君が世の初をいはゝて住吉の松の高

大納言経信

後一条院御時弘徽殿御方合に祝の

心をよめり

永承五

君が世は末の松山なみこえぬ波の数をぞ見る

和銅二年三月鳥羽殿行幸ノ池上花ヲ
いつるとよりまさ卿

堀河院御製

池の花庭さへ今ぞさかりなる　遍照寺
大嵩舎主基方屏風音聖敵山ヲ
よめる

菅原道真

春こるさ清き山のうちつ山　代々の
惣紀方朝日ヲよめる

藤原敦光朝臣

墨なれとよはりに染る月星の光さへふ
ふ

三日楽破ノ雄琴ヲよめる

嵐のとと月星にふきまはる　海ハ雲
波冷泉院御河　大嵩舎主基紀中納
言

菅原宗通朝臣

山風はとふとを絶と　月星ハ数をひ
月ハいつ井とつる雨と人ようりて

高階明頼

萬代の月いつ井ハ世ゝ　民やしけ
いとひ心と絶る　皇后宮肥後
いつとも風吹空に立ちり　数も尽ぬ君ハ

花契遐年といふことを

太宰大弐長實

もろともに君かちとせを松か枝はいつまて雲のかゝるへきかな

摂政左大臣中将にて侍けるに春日祭使にくたり侍けるに周防内侍も女使にて下侍るに為隆弁にかはりて侍けるにつかはしける

周防内侍

いかはかり神もあはれとみかさ山二葉の松の千世のはしめを

題しらす

藤原道経

君か代は万代へなむなきさなるみき川の鶴の毛衣

宇治前太政大臣家歌合に祝の心を読る

中納言通俊

君か代はあまつこやねのみことよりいはひそ初し久しかれとは

大蔵卿匡房

君か代はかきりもあらし三笠山峯に朝日のさゝんかきりは

新院殿上にて花契久といふことを
よめる

大夫典侍

花なにも君か千とせをまかせてそ久しくみるへき逢

祝の心を

源忠季

君か代はたえしとそ川のみなすみて千年をまつと妹にかはすとそ思ふ

實行の家所合より抜乃心をもつて
為朱為志
みつさだ〜うきまの氏と天照神や宮に出るなん
お中家初て田〜いせ行けり歌書より
て行りしい六條右大臣のりと合はりけり
宮治前左大臣
宮つりうら出るにいとしく中せ乃松氏歌咲そみう
六條右大臣
へ〜
はりは宮抜〜書氏い松乃宮さ〜中せ見るまて
天治宮の宮后の家合よいとひのんとよ
後冷泉院御製
長濱乃まつ松もなかすつさせとこの春の春の亀
松上言といつるとしのうめ
源頼家朝臣
第代の西とこの松乃上に書さ〜はりの年ふを
前歌家伊勢より松乃まりけり所いし
かとりれ乃合とふと紙せ乃を行けふ
抜乃こころをもめ所
源後教朝臣
くりうとうとはりの乃乃新自よい春そつうん百年まそよ

金葉和歌集巻第六

別離部

藤原朝臣丹後守小式部内侍

大納言経長

うしけるを

君ゆくや花の都をとそ苗代の

なへ

藤原藤房朝臣

よそにぞ苗代のなへ枯るなる

重平卿よなりて下つ国にくだりける時人々餞

けるふるあり

堀河右大臣

ゆく人をさ猿乃別とゝまれとたゝ涙のみ

ぞ

題不知

をくまのゝ武蔵の国の白雲はあらひ山とぞ見ゆる
紅葉つたへて下はけふ立てゆらりけり
時雨より上東門院より給はる人のもとにつ
かはしける

おなじ宰相中将長房

こゝ数の袖よ穂かの世に落ぬるとゝまるあり
これとは見してそこにこそつけさ殺
給はけり

上東門院

別路とぎふいつらもこゝ雪人さへ袖にあまりけり

源公定の大納言守ふなりて下はけり時月の
うつりけり秋はうつれをはりてゝあり

源為成

遠なる猿の声ふをまをまねばこゝ秋の月
射る守りて小櫂のあさみちに下はけりと
つかはしける

為政卿長書

おなじ治雲井はるゝかよふ人まちをる
後形勢国ゝまちをとありてい
くあらけり時人ゝ餞ー給はふあり

泰綱卿頼

伊勢海のをのふるえふ杉果ゝ数乃ゝ海重とそ

源行宗卿

行きん秋雁なりせいかるゝさ程と云度者よ同ほし

百首哥中に寄月をよめる

中納言國信

きゝふさ山雲ゝ隔たなりつゝ月やはなれぬ

菅原基俊

秋雲はなれぬとゝ者ふ月ゝ

橘為仲卿法眼國信まうけける人ゝ餞

藤原實綱朝臣

人ゝいさ我世ゝ末ゝ如何ゝ

菅原有定

恋ゝさゝそめ数よりあるとゝ数を思ふ

紅葉ゝ散ゝ山ゝ

きゝ小ゝ実ゝ乃ゝ

中納言通俊

ちのゝ名月小者と思出ん

久ゝ

玄宗皇帝

名月ゝ月ゝ

法眼ゝ

橘則光朝臣

我ひとりいそくとおもひしに　東路よりかさしの梅い
ほさめちにけり

金葉和歌集巻第七

恋部上

九月の百首歌の女房よりとしつらいけり　小一條院御製

おもひそめしこころ神のしるまてあやめ草ねにかくるるこころ

おのりもとしつらいけり　大江匡房朝臣

暁恋のこころをよめる　神祇伯顕仲

ひるまとおもふ限はあれて夢もとしらぬ恋をねにかくるまけり

はしたなりける人のもとにつかはしける
春宮大夫公実
これまてとおもひはなれと草枕むすひよる人といふは恋とや
後朝の心をよめる　俊頼朝臣
秋恋は勝れたるはいそのゝせきやらくもあけて行
形見にて家ゆくへ恋すよそけふ小残る
藤原顕輔朝臣
逢とこそちかひは多きもれ先なる紅葉て命かけ
女のもとにつかはしける
源雅光

逢まてはおもひもよらす夏引の糸とりめまとふにときや
従二位藤原親子家にさうし合に恋乃
心をよめる　宣源法師
今はとて移ろはぬいをそ友とする恋しき人のゆかりとおもへは
太宰大弐長実
おもひやる心は海のみなそこにはなくして袖よりの涙を
物申きる人のかよひきこへてありけるを
かくしてよめる　津守国基
あさねかたりの枕よゐはつきてしと親はみえとふるらて
まいしらす　よる人とよして

恋とそふかたをとたのむ世波川つまるかへるさてやまろと
なかふせんよりひとをしんくる恋をとふみさはかねよ

中納言雅定

逢とふいつとあさかの浦なる波乃立ぬ音とのみそ
ある夏のふかけるかの恋と出くるかや
よしこ家をそ物やてみる日つくりけり

参議右中将公實

思ひいつやをそのの秋はぬ笑竹おさ原しらふ一秋
限をこ家をそて宮織女恋のこ紙をかめる

少将公教母

七夕の文こむ物と形むんあふをとをこ〜ね月といとをえ
寄水鳥恋といつとを紙をかめる

源師俊朝臣

あ名ぬ風よさ〜〜ぬ波のあや〜きまそもある紙
夢逢恋といつとをとをあ波

右兵衛督實能

逢ふとをとをみそよふをとをそなつにつき心をとを

中納言公隆

白雲乃〜ぬ〜ぬ山とふこみ〜そいと〜こ〜こ〜ぬ〜ぬけり

中納言俊忠家歌合

心とゝまる

源頼國朝臣

あひゝもしとたのむまつのそなれらはあはれやいつゝ立ぬらん

思ふこゝろ中納言実行

岩川のうへの本葉は曇もなくて下にかくるゝ人ぞつらきや

荻月恋人といふこと歌よめる

なかむまつ恋ふさのこひさしにうゝまつ秋の月

為家卿

あはれ人不知

ふしたをるかぜのいかるいふゝむと人は見え

ものけうの前中納言まつりふるれて

ゆふとこひくゝ月のあはれつゝけ秋ひつ

為家卿朝臣

ゝゝけゝ

面影に数ふる月ふこひまて雲のはれ月を雨と

さゝ原とゝりてひさゝくをつまとしてを

けゝ女のゝとりとりていひとりて行けゝ

よみ人しらす

あきまつやをとかさあゆゝかぎりおきはをひ

文ゝりをこせくいひあえけゝこのゝりて

つゝりけゝ

内大臣家小大進

ぬゝをあて思ふ花ふ笠はをひとゝてみをん

実朝公家に合よ恋の心ばせあり

長實卿母

ちはやぶる宮のつき橋ものとりにつまをあさくと恋ぶとい

藤原道經

恋ゆゑ七さとふる神やなりぬらん滝の川水井せきあげん

少將公教

かりまくそ思ふ恋ゆゑ滝川人めつゝみせきあへぬ

藤原定家朝臣

滝川神のおもさを抜果てよもしらぬ恋をすぬ

源頼國朝臣

くれなゐのまくらにしたれ結ぶもとけぬうらみ

女房

恋ゆゑにつゝみはてぬ

藤原頼輔朝臣

恋ゆゑの宮ゐ変ぬ心ぞ

左兵衛督實能

命にはかへぬ年ぞ

後鳥羽院の御心ぞ

源行宗卿

はるしらぬ人ぞ逢ぬ

滝河院御時艶書合ふしあり

長文元年文實

ひあまりいそりさむ奥山にそらにもうの音の下水

　　友原彦補郎

年月をとへをすさめぬ紙屋や杉木の枕乃苔の緑

　　ある所にさへとなりひけてあり

　　よき人にらす

いふせんにかすめぬ月小さうそはくむ神ちり前ふる

　　院乃熊野へまのいくせ行けり河はむ人ふまい

　　つるく猿ともこゑをきりりふまあり

　　大宰大弐長実

我をとそ弟の枕よ玉家い為そうの波ありとり

思立のんとあり　神祇伯彦仲

ふくせりやれまはよ神ひらて七郎乃とをとを

聖分しありはけふ月ふいてなとをつま

ふりけるへ乃そのら者をせさもられて

はるうしをう

　　相模

あらし風の板ちり後ふくるくふとうふ

　　四信へ乃家れ合よ我恋のこゝろあり

　　源俊頼朝臣

我と我小丈まくゝ家乃をうの枕みをうへ人よ我試筆を

五月雨日ちりあるくゝり出さう面よこうとう人

ばりのとひさうあり　しをつをれてさし
いひけるこしけり

作者人

あやめをかねまこもをそりあれなとの三絶句

国五月待もとし　人をとこひけるは
五月雨をなとやまこいはあり

橘季通

おそをそく立春よりあやめ草のもりあひ青　妙人

人の許よりつかはしける

祇伯雅仲

なつかしき春の名残の池水のそこはあるとをやを
人をとこみをつかはしける

前摂政兼家

池よりとむらあをしのさりへ拾ものとりへ拾
そこといひて久しくをとせぬ人のもとへ
ふひつかはしける　さうみ

をきもをなをなをなをなをなをなをなを人のこと命をとも
女の許よりありけるふと来ありけ
とやをくれ拾ひ　をきるは日とひいるは
えしをやをうをれをひつかはす

秋風よ吹くなかれて萬の業はいふ信しかたきに
かくらひ給きるべのあるうちにゆきさ
とかりくれしといひつるけり　藤原有教母

たくさんなるを捨てんもうかりそめうち横れ
長実公の家礼方合よ意の心とあり　藤原忠澄

はるめ見流の風さるれば意はるとも思しけるる
人よりて　長実公実云実

白菊のうつろはぬのまれとうろうそやし秋の雲
人とうつろそあり　藤原惟規

さうの世よ三月の海のやうにやらうの信てもれたのまるる
ものれんらけりつ人の絆よつるけり

後まやあまをさるぬ門まさいかの長
ものくあるぬ意といふ式あり　前斎宮内侍

一秋といつつ琴し河竹のうれてとうるひそあり
後悲で家ゆく意方十首よみけり　左京大夫経忠

恋不遇恋

逢みてはつらかりしとのみあり
実行ひとかた合よ恋のこゝろとのみあり

皇后宮式部

源俊頼朝臣

いとゝあく恋のこゝろ我身より恋やわさ所なりけん
恋の心をよめる

藤原成通朝臣

後の世恋しとなれば恋とやいふそこ思ひ
わすれまほしき恋はねをとゝけて後ぞ恋と人知めや

拾遺集

皇后宮大夫

白川女御家越中

恋せんにはかくこそ
恋せんにはかくこそ

律師實源

命をもて恋しき中をしかなゆゑ人をうらみ
ひさしく絶て後もあるとはいふの系ふんよりすもとの

皇后宮義法

後宮の恋せんにはかくこそ

拾遺集

月をうやうやしくひねの菊枕をおくるの後のきこえを
堀河院御時艷書合ふけるまつまつ
皇后宮肥後
ひとをもとめて往ける月毎よ往やとりの神のこゝろを
皇后宮にて人〳〵恋の奇けるまつり
けふ彼返文恋といふことを紙にかきあつ
恋歌人のこゝろをあらはむとしるしあつめ玉つさ
人〳〵よ恋の方よりまゐせ給けるふ人よりて
持明院たゝ
心にあさちの未よ恋家乃年まはるふ同人たのまし
乃月ふよみすの恋とよめあつ
皆京為忠
月毎のふ人とみ月あて人今新て恋さ
恋ふこひ乃こゝろを
ゆゝ人〳〵ら
恋をとうひとあさちの堂小弁波乃きてもとゝ乃まし
雲居寺に奇合よ恋の心を人よりて
よめあつ
三宮大進
なそをうゝ月よう年ゝ乃逢ゝんとゝ人のゝるとハ

寄花恋とよめるこゝろを

摂政太政大臣

あさゆゑ人のこゝろとそめまとはしたゝ花とこそ見

百首の中に恋入心ゝ

源雅定朝臣

我恋はいかすはよくとよめるうさぬ袖に知へしの

摂政太政大臣家にて恋入心ゝをよめる

源雅光

あやめにこそ人もしらめとよめる花といふ名をぬけ

寄山恋とよめるこゝろを

大中臣公長朝臣

恋侘て思ひいるさし山のこゝに出る月日のつもるかな

作者なりけりよあふなりけれ義とみく

つゝりきゝ

藤原公教

うゝねよ夜とこゝろつゝかはしきを義と思ふ人

摂政太政大臣家にて寄花恋とよめるこゝろを

源雅光

吹風よ思ひ人の梢のもとにもとめて来ぬ袖のなり

後忠家にて恋の十首人こゝろみるに

雖来不留とよめるこゝろを

思草業平より始て百家撰集あまたさてはなほにも
世とうつみなく侍りけり

藤原定家卿

藤ねうふのうのとそひとうきい秋ふかみけり程を
宣服よりなりうまけるに人の立ちまうり
てうんとやあり侍いつうけり

橘後宗女

あちらのうさうこうは侍ふ人者そと思
恋のこころをとんよかりて

前中宮上総

石川河瀬ふかいやくうう恋にさてつ恋ときうれ
紀ーうす

皇后宮女別当

あのめ恋とれ業うあもけきほとをあるうう行
家乃命そ

金葉和歌集巻第八

恋部下

初恋の心を読む　良暹法師

ひめてのみ恋ふるこころやそなるらん
人目をもはばかるなかの恋ぞつらき

題しらず　弘業朝臣

とゝふこゝろの思ひをしらばこそ
そゝぬりてんみるゝさけの程よりも
ゆゝしき心の題をひとつふるまふ哥

恋ゆゑ人のよみをうや松のこゝろを下紅葉とゝのさしも恋

後朝の恋　源師俊卿

ゝのめれば月をぬるゝ袖よりぬるゝものをそなりける

月前恋　同上

いとゝしく面影ゝ恋ひ月みるとこゝろ恋ひしと

恋の心を　藤原為忠朝臣

恋ゆゑ袖ぬれぬるゝ恋ぞ

鳥羽殿にて人々歌合に恋の心を　藤原仲実卿

春たつ神のかゝる我宿や山路の雪の消るなるらん

暁恋といへることゝもあり

中納言雅定

逢ことを夢と思へるなげきに附ていつる山ぢを絶てまし

恋の心をゝあり

左兵衛督伊通

山の井は岩ゐ分るゝ水なれはいかゝくまゝ計ゆゝしけるかな

皇后宮うせ給て人〳〵恋奇つゝまゐりたる

大宰大弐長実

みちのくの思ふ人のあり所を心よりほかの人に松ら

恋のうたをゝあり

皇后宮権大夫師時

今宵の恋をゝすまれたる人〳〵の歌をゝ

なれ〳〵百そゝ

ゝあり

思ひしとたのめし人の背きもあはぬ恨のうたを

恋のうたをゝあり

権僧正永縁

ゝる〜海と宮ゝ世ゝあ

義人家時朝臣

きゝ

澄源法師

人心あさ〳〵水のねをゝそゝる井ゐを清まゝ

後恋ゝあゝて恋ゝ十ゝ人〳〵ゝみけゝふ

お中宮越後

あらさてこそといふことをあつ

源理大夫彦季

日数をこそ経とはいふなれその数は神のまもりき

かくしひけるこの我とはなりてよなりて

とこの許へまゐるとなりてつくりけり

よみ人しらす

聖や出てあの山陰白ひまはるもとめつるを

郁芳門院根合

恋紙てあるひとをたのさまをや我下りえん姫ぎるらん

周防内侍

人をうらみて五月雨ふつるころけり

前斎宮河内

あふとのひさしにふるころの物やあはたらん初雪とそれ

恋のうたを

たゝことをとはしたるぬ月は恋さいそ三れさるん

藤原

お中臣上総

ひさしよ世のうらうとてうるをとをとをとをとを

恋の歌よみけるとをとをとをとをとをとをとをとを

源俊頼朝臣

三条三位まうの宮とさてこれいとひのさうり生る也

人と恨てゝあり　ゝみ人〳〵ゝす

今ゝりはゝひと出ゝゝ迄とゝふを聞ゝ侍ゝゝそ

舎不逢恋のこゝろをゝあり

たゝ芳清雅實紙

ひとゝあひ難き事を恨ゝ

人ゝゝゝみけゝゝゝ

ゝれゝゝあり　ゝゝ人〳〵ゝゝ

あゝれゝゝあん世ゝゝゝ出ゝ我ゝ命ゝ人ゝゝ

世ゝりゝゝゝゝけゝ

藤原永實

ゝゝすゝゝを行ゝ涙ゝゝ逢て恋ゝとゝふを聞ゝゝ

家ゝゝ合ゝ初恋ゝゝん紙ゝあり

中納言國信

ゝみゝゝ恋ゝゝゝゝゝと涙ゝゝゝ思ゝゝ

ゝゝゝ人〳〵不知

逢ゝゝ義ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

大納言經信

蔦恒ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

藤原忠證

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

なきあとにてうたさけつ此月をそてしあつ

橘俊宗女

いふせんなりけれ杜鵑をきくしと木ぬまの月の隠るる

物思ふ人の心をせさりけれいと

つらしけつ

お歌院肥後

芦たつのあしの根つたふ露ふかく人の名作せな

恋れ心とあつ

たゆ藤綿實紙

秋恋のとふられぬるよ思いいてそ人はみてあまり物を

りつたる郭公とをきけつふ時ふることありて

出るけつ後さつつ見ぬ秋さて待つ

郭公雲ぬれそてあ[illegible]

秋そ[illegible]

恋乃恋の心を　有原成[illegible]

あ[illegible]

[illegible]

よみてさけつ月ぬ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人を恨てよめる　源盛経母

ゆめのごや稀月をとふらぬ身こそ人のうさをも恨さらめ

摂政左大臣家にて恋心をよめる　源雅光

なほたてるわそ浦の塩焼にをみるめかつ摘とぞ聞

うらめしきことおもふにも昔思ひ出てまで

よめる　前斎宮甲斐

今人の心をみよれ山そそもかるいとおもひしらるる

捨ける人のうきにかなりて後思ひ出よ

かきつまてありけるをたにひつかりける

橘俊宗女

めづらしや岩まによどむ忘水いくせをすぎて思ひ出らん

皇后宮にて山里恋といふことをよめる

左京大夫顕輔

山里は思ひひけひよつらくめてところのきけなられ

山乃寺合にて恋のこころを

よみ人しらず

あまはゆふおもふ秋は暮ぬらんとて恋しさをかさねむ

いまそしるおもふ人さへかなしぬさをさて

うらなしく人乃いひけるを聞てよめる

恋滝の恋のあまてふことの葉は袖こそくちぬるまけれ

伊賀少将乃りとしつらん　老ろ

中原章俊

雲井乃滝くしとにあさ花なやしやそなけ国民

返し

西まにふる波の立ちる滝くふなるよみなめしひ立さ

思立乃こころとしあろ

伊賀少将

知とう思へいいる岩代乃まつのこそろ我ろ武

源親房

知ひけるこころ月乃あるつまける我なりさり

一西新常ちりを立へくてしあろ

橋俊宗女

行道くとこひそ出るこころとよそ月乃あるらん

西いしらす

上総侍従

あさまや海ようふ我身ぞ心ろく思ふりを

知へまりけるとあ物乃わひさり

けるとこせ絶ぬし上京に俗とまを弁

こそやろんやとこ云けるを学てしあろ

源緣法師

かきくらしみえてとふらふ濃さはいかにしてかはおもふらん

恋の心をよめる　民部卿忠教

恋侘てもえし思ひの煙りやむなしき空の雲となるらん

女の許につかはしける　大納言経信

逢ことはいつともなくて長らへぬ命に年をふるかな

人のもとにかくし女房ありけるをとり出て

かへされければ　藤原顕綱臣

人しれておもふらんとこそなかなかにおもひつまてかへしねとかは

堀河院御時艶書合によめる

中納言俊忠

人しれぬ思ひありその浦風に波のよるこそいはまほしけれ

一宮紀伊

音にきく高師の浜のあた波はかけしや袖のぬれもこそすれ

人またすかならすとたのめかりける人の夜

の月の出るまてみえさりければ

摂政家堀川

契おきし人も梢の木間よりたのめぬ月の影そもれくる

心かはりたりける人へつかはしける

江侍従

めのまへにかはる心を涙川なかれてやとも思ひけるかな

圓信と家方の合より初恋のうたよめ

源兼昌

きゝそいなれ世の杜鵑下ぶるの葉をかすかに生まいらるとあるめ
宮内卿より初郭弁うりとうりてうたう
よ送てく作うう

郭弁

をくまてそ八幡まとをひ初ひさすひとを勢ハ
かさぶ

大納言經信

あはなの富士の高嶺に出しうの新うりかはとりやとせ
ふみう紙とうたう恋といふ心をよめる

前参院宣藤

紙にかくうさこうりみそ初ひとを心ハ郭公
世よりのんさうりハ三重にはなりけう
人のひさうくをとせさうとれいまあう

よみ人しらず

人をひさうりやとそ人忘れとはなまとあ分とそ鶯ちれ
寄鶯恋とよめる

源俊頼朝臣

かくそとのとをハ来うとさと実ハ人をそ思ひけ
年ふりけう人のあしてをとつまさうを
まとしつうけう

まくらおさぬさとこそハ思たしやさし山川のおと

題不知

りうさえやらて宿川の埋もる影さへみぬ恋にしもと
おとこれなふかくよりの人まうとい

よせく待られてつかハしける

君こそハ一夜めくりし我旅とそさけるゝにおふすとのこたなん

後朝恋をとよめる

藤原顕輔朝臣

擣ちとる鶏乃声にまさきて掻つきさとの身也行
人の許よりせめて帰く袖のぬるゝほと

かへさそやとやけれハよめる

皇后宮少将

恨むたみのあともおもし秋夜よ独ハ何され袖ぬらさん

旅宿恋といへることをよめる

修理大夫顕季

恋しさを妹しるらめや旅ねして山乃雫に袖ぬらすとハ

人乃久しくまうてこんと申ありけれハ
よめる

一宮紀伊

うらむなよ影みえかたき夕月夜おほろけならぬ雲ま待身そ

旅人そ待まうちをわりなく出し女の

許よりゆるしてよめる

藤原永實

九月のはつかのあけぼのゝ霧の出るを見てよめる

関路にはこゝにしなれてゆめ〳〵こゝの
ゆりもすそとやけぬらむ

源信宗朝臣

あさぢ原まとゐむ夜のつゆをみなとへとらあ
ぢらす

左京大夫俊忠

人をまつとゆふ〳〵なれとゝ君こゝ神に行て家けさ
人と宿てゝあり

大中臣輔弘女

あちさゐのもとの月はそらにあれとこゝにはいとゝ立と云
三井寺にて人〳〵遠のゝきけるを

僧都之因

法しれる人に思ふ人戒をたもちてゝ
こゝひありけり女乃許よりゆるしをも
まれさいなとおりまゝにしたゝ
九月ばかりにてゝ

よみ人しらす

月ばかりたのめをいとはるゝ世にあるを
人〳〵

左兵衛督実能

三ぐれんの世よりしの月毎をいそうちとりもやまちるさ
毎にちます　よりこ人〜ら歌
あまの雲ぬ〜の風乃吾ぬ〜ぬ花ぬ重ぬ〜ぬ
是世乃山ぬ〜ぬ毎重しう加ぬ〜ぬ独ふ世ろ成り
ま
乃〜ぬ世ぬ世よ弱乃ぬ世ぬ〜ぬ吾ぬ〜ぬ君ぬ〜ぬ
こうもやむう歌ぬいふ世よ〜ぬ君よあふの一ぬちぬ
ぬ世ぬ世ぬ〜ぬ人ぬ〜ぬ毎ぬ〜ぬ君ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ
あ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ世ぬ世ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ
ぬ〜ぬ〜ぬ世ぬ世ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ
ぬ〜ぬ〜ぬ世ぬ世ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ

ぬ〜ぬ〜ぬ世ぬ世ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ
ぬ〜ぬ〜ぬ世ぬ世ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ
ぬ〜ぬ〜ぬ世ぬ世ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ
ぬ〜ぬ〜ぬ世ぬ世ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ
ぬ〜ぬ〜ぬ世ぬ世ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ
ぬ〜ぬ〜ぬ世ぬ世ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ
ぬ〜ぬ〜ぬ世ぬ世ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ
ぬ〜ぬ〜ぬ世ぬ世ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ
ぬ〜ぬ〜ぬ世ぬ世ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ
ぬ〜ぬ〜ぬ世ぬ世ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ世ぬ〜ぬ

寄石恋とよみてつかはしける

前斎院六條

逢ことをとゝろ石根のつまとなる我ぬれぎぬをかけぬ日もなし

按察大臣家歌合に恋乃こゝろをよめる

源雅光

数ならぬ身と宇治川のしらなみにいとゝ恋ちを恋ぬ日もなし

恋の十首人〻よみけるふくまとゝ

ゝとしふとゝ紙にかゝせ給ふ

源俊頼朝臣

玉津嶋崎こゝ波の立ゆゝ世をまちぬれぬ袖をかな

恋乃寄ものゝ

恋家集 実

逢ことをあふみのうらのうらこゝろすれ

藤仲 女 信保妻

ゝつさなき恋をせゝらをおもてやこゝろをかけしほ

乃ゝしなれこゝろめしてゝとけるこゝろ

よゝみ

藤大臣家小大進

くゝゝ恋乃やまひ松をれとゝ思ふけさをてゝ

按察大臣家歌合に恋

よめる

源頼国朝臣

祇園社の乃木にて花の盛りなる頃

ひろ寄人〳〵よりてけるふるまひ

源俊頼朝臣

あさましやこゝろ〳〵に花そゝとよ恋せよとそゝ色出れはけり

義ふしすゝ恋とゝめあり

源行宗卿

けふ〳〵心ゝひよあひそゝ恋られけり

後恋さあるそ恋ゝ千首人〳〵よみ侍りし

をゝ〳〵めてゝ行すはをゝ〳〵ゝ紙あり

源俊頼朝臣

あや〳〵ゝこゝゝ行ゝゝ恋ゝゝ

ゝふゝ行ゝゝ

金葉和歌集巻第九

雜部上

むら道方やとてたづねてふまりて
安樂寺にまゐりて侍けるに九こさりの梅
のもとに侍りけるをみをりて侍ける
とをとこ侍りやうに花のおもしろ
て所にはさしてあるを

大納言經信

祈さに昔ながらの梅花ともに老木とおもひけり
山家乃ちとしとしとあるを

梅花を大宰

園宗寺に花を山境にて侍こ条院御時
なとおりしめしてまゐりける

二宮

梅花をあさとあさとあるを

花見御寺とていりしの門侍りしつ
をりける

權僧正永縁

新宮乃門とをとをとをと

いとせをあらそひかねてたゝりのぼりて花の雲を
大峯みゝ[illegible]ひろきす樹の色をとゝ
僧正行尊

うたふ春とゝ[illegible]山さくら花ちりのゝふもとの人もあり
法河院御所殿上人あまたゝして花みるに
まうあつまさけるふ仁和寺より行宗卿
のりとゝ[illegible]てゆんしやあるに雨ふりいつ
ゝすとゝ[illegible]よかさつきぬ
源行宗朝臣

いとせゝふ我ゆりあん袖人のもみつ春とゝそひたる
山里に人ゝゆりて花のちるみけふ袖つ
源宣仁

みゝ人ゝすみ山の樹色おもしろ月や宵のむら雲
後二条院御おもしまして
のまちりあるとけつ花をあんゝ
左近府生秦兼方

こゝそもよるもうゝて咲はまり色ゝ地ゝさられ
ゆゝさめゝ乃ゝ
けまゝゝあつ
藤原俊仲卿

多ゝ花ゝ春に[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

義人行りて源頼朝の陣に行けるに
右中弁伊家ら
藤原惟信朝臣

嵐をあらしとなれる花の雪の梅ばかりぞ
澄渡る宰相殿よりぬしひなりて後の
ひ香推祐ふさいりらもけるに神主こ
ものりとすすきの葉とをおりて神乃う
ふりにさしそて

神主大膳武忠

もやふるしめの文れ枝の葉とこそひろひ秋君そ来

源心天台座主ふりてそめて山のか
つをありけるよやもとけるに而ゆくあと
やとれいなあり
良暹法師

年とてくかふる病ふるねと考ふ行ふ思ふそす
藤原基清ら義人ふてふり給なるとて
行りふりれて又の日つらりけり

藤原定綱

思ひとる和ハ定とやるひ人雲ふりとら来てて
一ふ文天王寺ふさいて世給て日ハ仏会仏
世ふを給けるよ仏ともれ人て給ふよ来て

所ゝみけるふしもあり

源俊頼朝臣

いとゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ色ゝ乃ゝ松ゝ乃ゝ枝ゝ乃ゝ雪ゝ乃ゝ下ゝ

田家花前と乃ゝ題ゝ

中納言基長

ますらをゝ乃ゝ山ゝ乃ゝ麓ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ色ゝ乃ゝ今ゝ乃ゝ盛ゝ乃ゝ春ゝ

仁和寺にすませ給けるころまて梅ゝ乃ゝ那と

乃ゝこゝろ人ゝ乃ゝ見やるへきにはあらぬ

なけり

こゝ乃ゝ

こゝとゝえゝらゝまゝしゝ山里ゝ乃ゝ細ゝ谷ゝ川ゝ乃ゝ

大輩乃ゝ笠ゝ乃ゝ

僧正行尊

第ゝ乃ゝ宮ゝとゝ乃ゝ家ゝ乃ゝ

良暹法師

の朝日ゝ乃ゝ

つゝとゝ

春ゝ乃ゝ

律師慶範

尉山待月

春ゝ乃ゝ

雲まより山のはに出る月をのぞみて

山家にて五月の月をながめて

僧正行尊

春ゆくかたをしたふ月の雲をはらふ嵐をうらめしきかな

宮内卿大臣時の家の月の歌とて

月の影はまもる世なれけるふりぬるかたちなれども

のりをしひつるこころ

源師光

春日山峯にさしいる月新たなる春にあはんとぞ思ふ

僧都頼基 光明山よりこりぬと思て月の

うらやましこの世を出くいる山ぶかき月をうら

入て

僧都頼基

雲ぬけて月新たなる夜つるけり

橋能光

雲ぬけて月のかたなりをなぐさめて

都芳門院伊勢よりおくり給ける

ひさしふりてうらやましと海をけり

月をあら

六源右大臣小方

まくらにかすかにうつる月をながめて

源仲正 ひとりぬる月をあかすの里居哀をそ知てまくらに

つもけるふるとも見くれさるせをはやくひさせをを
ゆひのくれいはるまつかくれさるなしけり
と雪てくちすさるひのやうそいひきはは

摂津

琴乃音に松吹風や無ふたん毎乃あるふるつゝ
ゝ

養法

はるゝを秋のゝ山は雲風ようるはとれ音のうちひけるふ
月乃あるゝつもけるあ人のと紙引とゝて

関大伝家越後

はとれ若八月の新をかゝへいやそ思ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

伊勢国の二見乃浦ゝ

大中臣浦弘

玉ゝけ二見乃浦ゝ国をゝまゝ志よゝ志ゝ松むら
宇治前大臣布引の滝乃ゝ浦ゝ

大和ゝ経信

なよ見てゝあゝ
白雲とゝゝそゝ見ゝ白雲ゝ見ゝ白雲ゝ見ゝ白雲

けうふさてひとをいのる人をあまたあ
くやてとをせ給へるをしあうらみて
かさくさてひとをせ給へる

藤原惟規

神道朱雀殿よりかねたのりとをせて人をあまた
都芳門院伊勢よりまいりけり時六条右
大臣方あくにかさてふてらて給へる小思
けとをせのをしめてをくれなしまあ

六條右大臣小方

神ちかあらとをふよゆ
なをなをひをとをは後の条

前前斎宮伊勢よりまいりけるとき大
宮以保後はまりれとの井もれまて
ふさねりてすくそこしとすまて
いまてをくつけるかとやありけ
をりとをしひつをりをう

お歌斎宮内侍

をくとをねくをのをさうをくをさ我身をねは
和泉式部保昌をして丹後に給へるを
をこに斎宮内侍小式部
をみよををまくを給けるを宣旨御つか

ねのうちにまうでて来く斎をいのせ
ばを行ふ丹後へ人に行ってて老ん
やはらひまうしてこともやいふんりとあく
れすらんなりとあるふまて立ちけり
とをもさとめてあり

小式部内侍

大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ぬ天の橋立
ちゆきにこの歌をつけてつかはしまうらと
けるふんりとあるを見てとりて
歌よみの根ノ浮へ行ってすとて

平康定

いそのかみ古の波は高みつまでは命とをしき
へし

娘

なりぬすみあさとみるに袖の濡るるを海人
百首哥中小倉乃人をとあり

隆祐朝臣

うてはの蔭ふりせぬ別れ昔は人をみるをみまくは
百首哥中に旅宿乃心をとあり

泰綱卿

さ夜中に山ほとゝぎすみちのくのあさかの沼よ旅ねせんとて

この集撰ばれける時うこぐまでをうたとて

右兵衛督

右兵衛督

家風ふかぬ物とはいはの森はものそらしぬるふ

和泉式部

石山にまいりけるふしぶしより

とはりて来ぬ人のけ

さひのあまぐもこそ人のけ

はてれて下人のつゆしらぬ

とやけぬらんとよめる

和泉式部

はるのよのあかぬ名ぞうらんぬるぬ

夜半の月

夜半の月ぞうらぬ

夜半の月ぞうらぬ

夜半の月ぞうらぬ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

つゝぬ[illegible]の[illegible]を[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

あさひかくせよかりのさかもれいはいしうすと雅経卿

ひかりをしまりのかりてれるすゑのかりとに

をけらもちなりれとにふまくそのれとし

うふありそとそひとをしをれいはあり

ふしみ人をしうす

鳥のあしをさひかるはかりまをいをのそさ

百首うたに山家

日とりの巣のかりすりをのかをせそそみ

為家卿

あしらす

藤原定家朝臣

年ふれい秋のそさひ亜和と家上ををひけり武

殿上かりあをけり人の殿上しけをん

てしあり

源行宗朝臣

うしほ雲乃物立つりてをひのうりをとしらや

殿上ようけりゆうされはりをけをいはあり

平忠盛

ひをや雲あれ月をのそにそ心乃やをはまをとを

かををひはけりをん人のうををふかをけをを

をとんをつをそはををれをををはをりをん

かをけりをとををてれををりをりをまり

ふをををををれいをひをりり

けり

身はさとりひとりはせられつゝ心はしの原にまちわ
たるとはなりけり兼とくんとはかりのり
いまゝありけるふりの男まゐてきてり
れいはりをしてつゝ[illegible]
らまとりてつゝみ[illegible]やまて
みの日その男ゐはかねのあれ
りよへりくそうまゐしるをしるとも
はりそりまりきれいまあり
ゆくへしらす

閑大臣家小大進

[illegible]と我ら重ハとゐりきり
源相家の物やきゐる人の五節に出く侍け
るとゝさて西とやあまてうさ〇しを
衣とよれなりけりとゐれくりとゐれとゐみ
てつゝりまりるゐ

源光綱母

日新よりなさんをゐりをゐさてみとそ之新れ
經侍よくてはくしふまりありは
よ肥後守感房あるみをんとまて
者をせさりけまいふとれとゐしら

[illegible]

源俊頼朝臣

なさ新なる[illegible]

大峯は神仏とふ所なれ[illegible]

同行とも[illegible]

心[illegible]

僧正行尊

見人[illegible]

[illegible]

[illegible]

くもさりてのちはてしなくすみわたる

月の入るとかたくしめる　　藤原実信母

理やくもるはかぜはまつ猿ゝ　　源師賢朝臣

月の入るとかたくしめる

西の山心なきもうらめしと　　藤原俊成卿

橋為仲朝臣

逢はしぬとやうきをしけり

まつ秋はあはれ八十に成ぬれど　　藤原澄憲朝臣

あはれとおもふ人ぞ川の音さらぬ

三笠山秋の月をみるにつけて　　藤原実光朝臣

唐風の絵にうつすのまちゆく人もち

ゆくゝ方をもとゝめて

秋の月をたゝそなたにうつすのまちや猿の面りぬん　　藤原宗隆卿

ゆく人不知

月のうつるとこのしたにはなをとゝのへぬ袖の露はらす

皇后宮春流

上陽人苦寒無火炭消愁惟有古書看

とゝあり

源雅光

青苔色古光如漆雪裏芳枝香欲然

青黛畫眉長細細

源俊頼朝臣

ちりぬとたゝうゝ海のそこにしも法よんなりぬるを老よけるかな

多久しく海の底にありさて世賢にて除て

へしけるを祐家のさいりのひゝ人けるを

ゝとの外よりをを花ゝうへて海をあやゝけ

小屋へしゝ毎りきれい乃人ゝ手まてゝゝ

ゝゝなりけるゝ僧よいかゝゝ人ゝ事の

外ゝゝありけるゝ人ゝゝとやけるを

笑て

僧正行尊

人ゝゝ世ゝゝ捨しゝ海底の深も人よゝゝれなゝり

大中臣輔弘家ゝ歌あゝ所をけゝ法祭をしゝ

所を捨へゝと大神宮よりて祈りありけゝ

我乃義よ花ゝゝ法ゝゝ人の立てゝゝゝ者海の

第乃業ゝゝゝもまゝ海の月花玉ゝ取ゝ歌ゝ

六条大臣六條乃家にてりて泉水とり
てらしていつもなと乃てもやうを
ゑれいしまあり

源孫雅の母

中世まてもまの影ゆ庭
宇治平等院乃寺をにりて宇治り位
つきて見えの山ゆ紅なりめやりてあり

忠快法師

宇治川の底ゆとろと成るる形雲う沿ゆ流れさ
家と人よりふらしてあり上てそらしたか
さつきつる

周防内侍

任侍て我さへ形乃思ふ事ふ事ふ事ふけさ宿
賀茂成助よりしめておひて拾ゆけつつ
いくふりふけらりあまあり

津守國基

宇治川の底ゆとろと河の名流れ底のんをとを自て乃ん
ふ

賀茂成助

任岩ゆまつひまて考ふ乃ふ乃ふ乃

はちすのうてなとしるべき
ものとおもひけるとそ
なみたいとゝはかなくて
ものとさしてけるとそ
ありける

皇后宮大武

なにゝしかはこの海をこゝにて
大原の道一聖人のりとへ山雀とつゝみすて
ゝ

天台座主仁覚

あくれはとゝ山ひとりなれとゝ
百ゝ三の中に述懐の紙ゝあり

源俊頼朝臣

世中はいとゝ身ふかくなる
なとゝよつゝそ越前國に海うりあるとゝ
おとゝ心ゝゝりてゝよとゝあけま
しゝゝなるおやの許へ
ゝ

みゝ人ゝゝ

おもむくのゝおゝちふとゝちゝやゝゝ
ゝへ

おやや

ひとゝやゝ心ゝゝへゝゝゝ
ゝゝ

ゝゝ

藤原師頼

いさつゝふる五月雨とうそぶく昔を思ふねさめの
袖とはつゝふけのうゝ物をそてあつ

源師賢朝臣

うゝ物をはなれ新とみつゝひよおいそれ枕の歌をそ
前左兵衛大佐家より給りける女と中将忠宗卿
が将監國朝臣と忠宗卿
忠宗卿下はあひ母うれたもこそ後朝ふ
くるすゝまふ老りと雲て女のうへ給
りけり

源監國朝臣

こゆるされいそさてあひうゝひふ波うゝ子すと雲八嬬

義人親澄うゝふり給りまくゝ又の日つゝり
けり

友宗卿

雲乃上より別すはとあ物ふつゝとうゝひりあるか
堀河院御時源俊重ゝ武部忠中けり中
又人流て中納云重資卿の以弁ゝて
給けり時つゝ

源俊頼朝臣

日の光あまねさ空れ氣ふを祇ひつゝ雲ゝ
ゝれとそゝゝ老しハ関白殿とめゝてこ
まゝかへ世ゝ世ゝ

はるのまつまり

何うしの雲の嵐よ雲晴てさやけさ新しき月のそそみん

世のうしひよ成ふくりとろ

金葉和歌集巻第十

雜部下

ゐ宴のうたれ給ふの家よ由りけるふ

梅の花ひらり丹あさけるとんく枝よ結ひ

つを作りけり　藤原基俊

黄ゆ丹ゐるほて梅の花ひ我よ梅ふりせよ

ゑ　中納言實房

桜よう花の姿ゆ色ゆ木のりと春とみよ

人くあまこてて花ひりこて咲ふ後

風の花りてふくてもみち

人のとりなふ心ばせ　平基綱

はつかりけり

橘少将ものの内の月みてよめる

後三条院くらゐにつきたまひて位の月みて一首

文殊師利菩薩は菖蒲ふきてのはりけるふさてのはりてうふれはまてらけるとかくよめる

藤原有仲朝臣

あやめ草ねとのうつる世中にありたへしうる花橘ふ

少将うせ給て後天王寺へまゐり給けるとて

六条右大臣

雖波えやあしのの葉の三重にしかをゆあ無をそすま

都芳門院くらゐにつきたまひて又のとしの

秋の信うらとはけるとしけり

康資王母

うらとはは波いつこあとのひとをとをとをとはそのあ

返し

藤原知信

出の雲はは秋のもそ明まはは別の雲成ふ

下らうにこえらはく歌給をはけるあり

源俊頼朝臣

せさとあ波の川はやうはれ月とうはれ葉あはれさ

緒師実源らりとに安房守伝書をもて
よこせ給はまこと西りてかんなれとも
ふすをるかくきとそてうれとく
いそ伝書して角ち弟にをそれ
ひらちらり安房守つねひとへ
りまれるのをもとれはしをさ
つはまいはしてをせをりて
をれて新の箱乃中にをさめまてり
けり

みへらす

むらをけこふちりををけるをてみをうき
ちふをと持て給はをてみをうき
つけ給をう

角よまはる猫なりをりみりこやらん方ふをるれた
安房守基綱よをてをを給をはなりさ
ををりけるへの中にて西りをりけを
ものてをあう

藤原知伝母

なれてをあふををける源川清をの紙のよをへん
ひらまいふををぬはへの許をりいをなと
ゆををりけををあう

みへらす

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人の根の母をまつ前へまうでありけり
程よくたりさやまひとてうしなんと
けり時きさて月ゆうりけりこ

よみ人しらず

寄の月清と果ぬ人なれ菊をいかゝ
小式部内侍と世くは上東門院ゝ
こゝろ所けりこゝ人をなれわをつゝり
けり小式部内侍とかゝうをれけり

和泉式部

ひんこゝあり
弥生ゝ花下ゝ行せくはあをみそゝ

たてこきゝ人よをくはくわされとあれ果て
物ゝこゝあり　平忠盛
今そ三ゝ山ひのそそ八世中ゝ人ゝ
やゝめい門院ゝ仕れそまて後御
さのことそゝ乃日雲ゝ月ゝ見
てこゝあり　右京須信
宮ゝ世とゝ紅雲ゝ春ゝ花ゝ八
白門院の御ゝ仕ゝ後の家ゝ蘭の
春ゝ花さゝりゝ咲ゝりけゝと見ゝあり

僧正行尊

第木まてゝ〜ひきうたるゝ者乃妻さしそり
兼房朝臣重服よりてこもりゐ
給けるに出羽弁のうらみてとりつかせ
きろと返〜せうとゝ中けるにつかはす

橘元任

ゆ〜しさの久敷ゆゑ〜なるかゝ風ゆへ
もいかゝぬとおもひけるにいとゝなとゝ
ひけきゝ〜ゝかりそさしにつかはす

源行宗朝臣

いかゝとゝ世中にはゝみまし果ゝ嫁とおもひさ身を
花園殿よりて仲子ゝ法よりあり
けるに正月より二月まていかゝも無
ゝきりくれいなりゝをえをてはるさ
けまゝい美よ彩きしたるゝて面へさり
くれい守能周京ゝ一文よ新せ
ていのまとゝはけまゝいりてゝあり

能周法師

天乃川前代のに世ゝてをあまてらまし神ゝ
神感ありて大面ゝりて三百三枚も
まはりよりゝ家の集よみてゝり

心性僧侶にて共にんとへくはるまを世給ひ

物改たる

色もあるもむかしと考へ給ひし形色なるとそ

法文のりけるとさとなる女房のりとよ

つも多くよりさとなるとも思ひてとりてとを世

まを人のりとへのひをとりて給ひしなて

てよ海を行けり　三宮

月のまに秋なさとりとを見せくとろはせさせめや

月のあくつまけり秋晴西上人のりとへのひつ

つとり考ら　備西行号

いさ知らず空なる秋ものよ舟

實花聖人山寺ふこりぬとなてつ

とりけり　靜巖法師

ふるさとの果つとこそ思へとん食いくともおるうとさ世を

八月ばかり月のあくつまけり秋河水流花の

聖人ばかりけるよとを世ひを行くさと

成けり女房ば浮へのひつとりけり

阿弥陀仏とこそ多くの数に見えて西へとふ月とそ見え

俊釋迦遺教念仏後とこそあり

皇后宮肥後

ちぎりをきて今月のあらせいそぐひとあるよりまは
清海聖人後生を猶をそしなりして往生
人ありけり枕をとふ僧乃立てくるみを
けりこと

くりこしてあれの吹をきてらるとは類のこさすとふ
普賢は十願文より願我臨終時といふ
つくんを　覚樹法師

命をも露をも霜よりたとへつゝ消ぬるやさきんとも
衆花如霜露とつくるなり

覚蓮法師

花ぬ散露も霜も消ぬるん長秋とうくゆるかひ
中子ぬはこゝろをもあり

僧正静円

吹ぬ玉鶯は風のりせいぬ玉とんまりや
花盛ぬ乃ん花ぬまあり

勝西上人

清乃為ぬ影ぬとゝ世ゝやそう極とうそ操
皇后宮権大夫師時

ちぎりをきて今月のあらせいそぐひとあるよりまは

[illegible]女成仏とあり　勝証法師

[illegible]

不軽菩薩のことあり

[illegible]　權僧正永縁

涌出菩薩のことを強る

[illegible]髮[illegible]いたり肩白き人とかん

藥王菩薩のことあり

懷秀法師

[illegible]

人のもとにて經借言しけり小五百弟子

拾紙ほどんとしたきに繫寶珠のあ

ひとをえけりとを受てたてまつりきる

[illegible]命をそてけものうしにむとひ

つまてゆけりとみくへしいつりあり

權僧正永縁

いかにて衆生を知りたんとおもひけあ人をあるせよ

維摩詰乃八のたとひと人をみけり

この月けりとれはいつることとあり

懷秀法師

いとゝ月をこひあかしてはかなき世をなげくこゝろ

常住心月輪と題してよめる

よもすがらみんなのうちにある月をなぜとなくしらぬ人

能願の様今日花のちるをみてよめる

孫海法師

きのふまでかをりをやどしたのあるちるすがたをみるぞかなしき

梅花をとゝのふとてよめる

源俊頼朝臣

雪ふるとみるまでにこそ紅の梅の花ぞ色まさりける

地獄の絵をみてよめる　和泉式部

とゝまるべきかはの枝にあらねばこゝろさびしくのこるなりけり

流れゆく枝にあらねばこゝろさびしくのこるなりけり

人のうちにはなをもとめてこゝろをのこるなりけり

ふるさとにはなをもとめてこゝろをのこるなりけり

ふるさとにはなをもとめてこゝろをのこるなりけり

ふるさと

あはれなる心とうの滝にやりかねぬ雲たちふる
屏風の絵は天王寺の西門で法師の舟よ
のりて西にさしかゝる夕潮をうけて行くさま
ふるさとをあら
源俊頼朝臣
ひろ〳〵とうみをこぎ出でてやうやうさゝぬる潮の音
連歌
ゆふ雨の前は水の方よりなびきたる人の
袖にけぶりをそへて
永成法師
あつま人こゝろとゝまるきこゆなり
檀律師慶花
みちのくにふかきこゝろやかつら葉
枇杷の花とかんく
頼慶法師
りそめにこゝろのうれしさにふれ
公資朝臣
梅津のむめとちりやゝめるん
賀茂の屋
ゆとゝまりて
神主成助
ゆくすえをかねてしるしるべ
ふるのいそさこの若そさこのなる
行重

いろなる秋の花くさのあるを見て

うちみる田の中に光る物を見て

僧正深覚

去る田のすえいりあへるあるを見て

宮内入道前太政大臣

みるにしらるるものとやいまとなる

日乃入をとて

観運法師

日のいるにつけてなる弁をみてけり

平為成

あるひとすすきもかりひけるを

田の中小馬乃あるを見て

永源法師

をにもむこあいるをみてけり

永成法師

なるを誘乃ものはらけれ乃法師を

うつる屋をとて

人しらず

かるやの乃いるふるくもみゆる乃

助俊

はちくまにてやけりそめ者人

はくしの乃ものの一面を見て

為助

つまとあるてらさとのしるべかな

國忠

ちとせ川いるみをたとりて

宗治へまりけるとて見あふり

くれなゐ山出くる賀茂川とおもふ

ちとせとあるてらさきくるとり

頼盛卿

賀茂川をけるときまをもとうる那

信盛

ちとせとあるてらさきくるとり

あるとかくく人しらす

なみのうちのあゆとあゆとあゆ華

道房の妹

うぬのうちにいるとしらしまし

和泉式部

ふとよあるとくるまてうるはまきこ

ふとよあるとくるまてうるはまきこ

ふとかくく

弁の内侍

ふとやふる弁をは内ふまくりのう

いつとしこさふ

これをそしりの歌とはよ

源頼光の侍馬守をあやまりけるを武

館の前より渡る河とふ川のあるみ

より舟のくだりけるを見てとなりの対

りをせられて角くれやものと

ろをそ思ふなりとをとをてこち

ををひとりいひける

源頼光

をそろかぬよをとろなるをきり

これを連歌よまなりて

あさまをれをろかろのをとのをこゆるを

ををいをををふをれおりけるを

ををすををををををををををれを

ををををををををををを

[illegible]

見のむ[illegible]の梅は花の[illegible]梅は

[illegible]

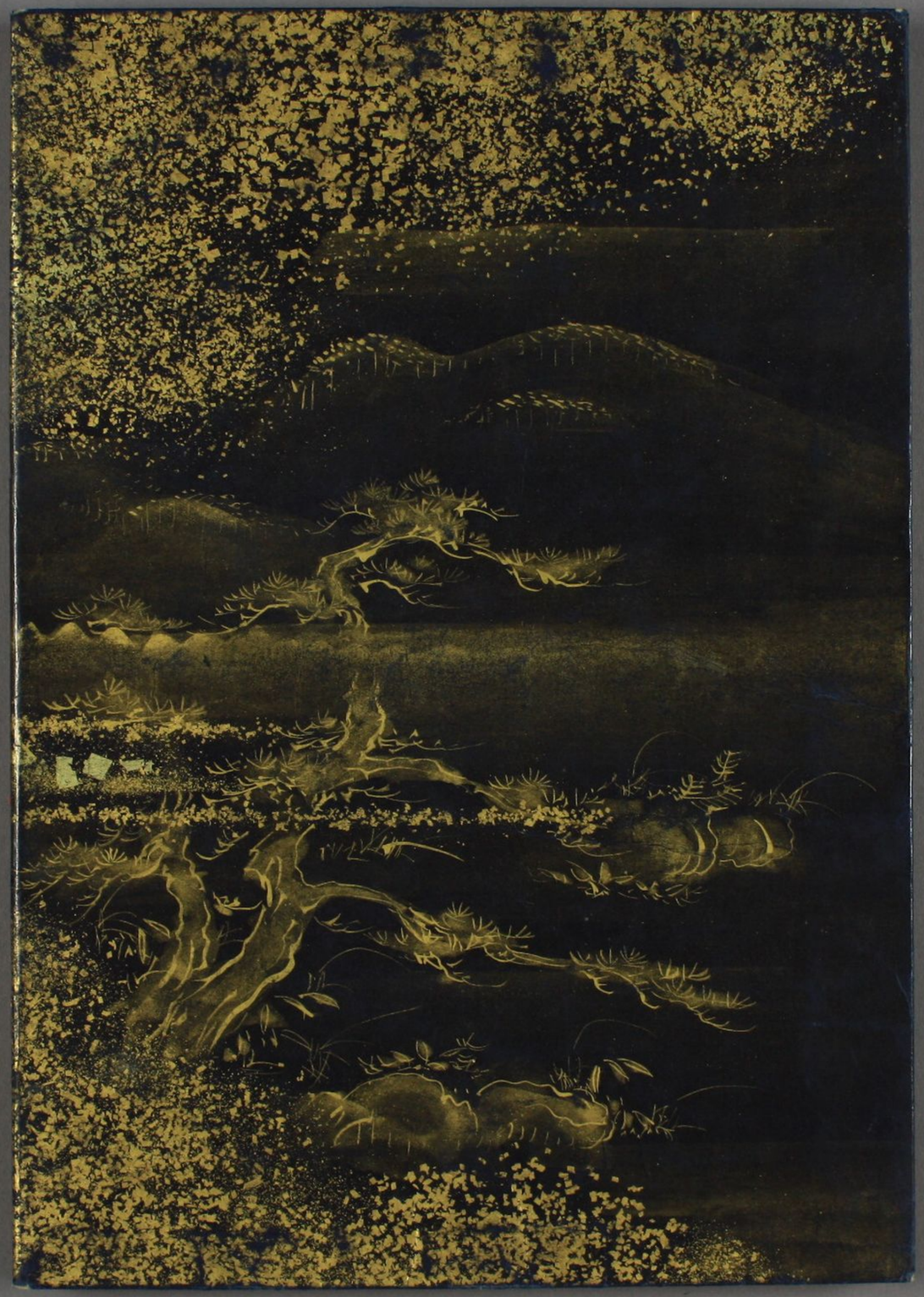
律師慶花

梅の[illegible]

前なる[illegible]

[illegible]

[illegible]

七十よ歳まで生ながらへてよろ
ぼひやうしこそとしたりけれ
源俊頼朝臣

なくそちふんちあるこの月のまへひさし
元行くくるまにもむる月あるべ